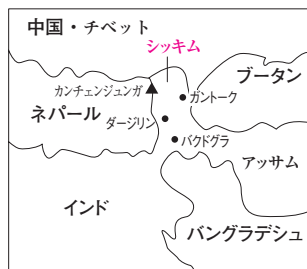


インド北部・旧シッキム王国巡検記

奈良大学地理学教室教授 池田 碩

本稿は、地理学教室主催の海外巡検(外国研究・単位認定)として、インド北部をたどった折の報告である。



巡検のおもな目的地は、ヒマラヤ山地東部で、ネパールとブータンの間に挟まれ、北側はチベットに接する「旧シッキム王国」への訪問と、その途中に位置し、英国統治時代に避暑地となり、紅茶

の生産地としても著名となったダージリン周辺を訪ねることであった。シッキム地方は、中・印のバッファゾーンであり、近年やっと両国間の政治が安定してきた結果、特別な入国申請をすれば許可されることになった地域である。

1. ヒンドスタン平原からヒマラヤ山脈へ

まずガンジスデルタの河口域に位置するカルカッタ(コルカタ)を訪れて、ヒンドゥー教の寺院や沐浴風景をながめ、本場のカレー料理を味わい、一応のインドの感覚に浸った後、シッキムへと向かった。飛行機でデルタ地帯を横断し、山麓で交通の要衝バグドグラに到着。ここからはヒマラヤを実感しつつたどりたいためバスをチャーターした。余裕があれば、英国統治時代の1881年から走り続けている山岳鉄道・通称トイトレイン(おもちゃの列車)で登りたい。魅力的だが最近故障が多く、天候しだいでストップとのこと。時間と日程に追われる我々には無理、諦める。

空港からバスでスタート。しばらくは山地に接するシュワリック丘陵地を走っていたが、一挙に山中へ突入。その後は勢よく登っていく。高度を増すにしたがい森林が少なくなり、本格的な山岳景観へと変わってくる。ヘアピンカーブが多く急斜面の連続。危険を感じてもすべてをドライバーにまかせるしかない。4時間位すぎたころやっと緩斜面となり、茶畑や農家が多くなる。やがて交通量も増してきて、街並も見えだ

す。バグドグラから約90kmの行程を経てダージリンに到着。

2. 山岳都市ダージリン



ダージリンからのヒマラヤ連山 中央がカンチェンジュンガ標高2100m、人口12.5万人。チベットからヒマラヤを横断する交易ルート上の市場街・宿場街であったが、英国の統治時代に軍人や政治家たちの避暑地となり大きく改変された。実はここもシッキム王国の領地、1835年に英国の東インド会社が半ば強制的に買い取ったところである。

周辺地域を含めたさらなる大きな変化は、ヒマラヤ山地の南側斜面で起こる。1500~2000mmの降雨を有する冷涼な気候が、茶の栽培に適していることがわかると、アッサム地方から茶が導入され、またたく間にモノカルチャー的農法での栽培が広がった。さらに紅茶への製品化にも成功し、ダージリンは高級紅茶のブランド名となる。実はトイトレイン



終点ダージリン駅 トイトレインの現役機関車



ダージリンの茶畑と農家の子どもたち

の開通も、茶の搬出に大きな目的があったのである。

ヒマラヤ連山の展望もすばらしい。第3の高峰カン

チェンジュンガ(8586m)が青い空を背景に雪煙をなびかせている。ここからトレッキングすれば4~5日位で、4輪駆動車をチャーターすれば2日位で、高峰直下を楽しめる。

3. シッキム州都・ガントーク



カリンポンのラマ教僧院

シッキムは、1950年にインドの保護領となり、第22番目の州に組み入れられた。州人口42万人。州都のガントークは、ダージリンからさらに山中へ約90km入った山深い地域に位置する。バスはその途中の峠で、バザールのあるカリンボンに寄る。ブータンの近くで、国境を越えての往來が盛んという。ラマ教のドルベンダラ僧院のある聖地で、ここからのヒマラヤの眺望もすばらしかった。

バスはさらに山並を何回も越えて、標高2200mの目的地ガントークに到着。ホテルで一休みし、窓越しに市街をながめるとバザールが見え、



ガントークのバザール

多くの人々が集まっている。さっそく出かけてみた。ほとんどの人がチベット系、商品の多くもチベットから入ってくるとのこと。しかし、今なお中国との国境線には不確定な部分もあるらしく、ガントークより北方へは観光とはいえ外国人の往來は不可。

山上(尾根上)に王宮や政庁の建物が並び、それに続く緩斜面中に、写真で示すように市街のメインストリートが走る。それより下方の斜面に多くの民家が片側に石垣を組みバランスを取るようにして張り付いている。



山上の都市ガントーク 中央がメインストリート

ガントークをあとにしたバスは、一旦谷底へ下り、そこから対岸の斜面を登っていくと大きな寺院が現れた。山腹に位置するチベット仏教カギュー派最高のゴンパ・ルームテック本山僧院である。



ラマ教の本山ルームテック僧院

さすがに厳肅な感じが漂よう大寺院。厳しい修行の聖山と聞いていたが、訪問した時間帯が良かったらしく、我々の記念写真には多くのお坊さんたちも加わってもらえた。

改めてシッキム地方は、人も文化もチベットであることを実感する。

4. 農村・農家訪問

伝統的な民家を訪問し、生活の実態をつかみたいと現地ガイドに依頼しておいたので、帰途、チタラコート村という山村でバスを止め交渉してもらい了解を得た。農家の人々は我々の突然の訪問に何ごとかと驚いておられたが、若い学生たちと接するうちに家の周囲だけでなく、家の中にもどうぞと言ってもらえ、ガイドを交えてフリートーキングも行った。

この村は約40戸で、電気はきておらず、食料はほぼ自給自足とのこと。訪問した農家は、祖父母と子供たちの夫婦と孫たち含めて14名の大家族。家の周囲に麦や野菜の畑を持ち、牛9頭、山羊15



チタラコート村で訪問した農家

頭、食用のハトとニワトリ数羽を飼っており、若干の現金収入は、山仕事や道路工事で稼いでいる。

学生たちは、自給自足で電気もない生活にびっくり。部屋の間取りをスケッチしたり、家財道具類を写真に納め、女子学生の中にはカマドの配置や食材などをメモしている者もいた。

その後、ダージリンに戻り、まるでタイムトンネルを抜け出したような感覚で、首都の巨大都市ニューデリーを巡り、インド世界の多様性を対照的な地域で体感した巡検を終えた。